

 AUGUST

# AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2018  
AUTUMN

**あいらすミステリア!**

~少女のつむぐ夢の秘跡~

大図書館の羊飼い ショートストーリー

**幸福の羊飼い** 加賀宮孝一

βサービス実施中!!

**あいらすミステリア!**  
~少女のつむぐ夢の秘跡~

スタッフ対談

## ＊まえがき

Introduction

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧いただきありがとうございます。

大変長らくお待ちいたしました。

2018年9月13日に、『あいりすミステリア!』は  
リニューアルしてのサービス再開を迎えることができました。

長いことお待ちしてしまった分、

戦闘や学園も含めシステムを全体的に見直すことができ、  
ゲームとしてかなりプレイしやすくなったと考えております。

また、Android端末にも対応し、外出先など様々な場所  
お楽しみいただくこともできるようになりました。

再リリースからはまだ数週間ですが、

お陰様で大変多くのお客様にプレイしていただいております。

全てのプレイしてくださっている皆様に厚く御礼申し上げます。

(未プレイの方も、基本無料で始められる

ブラウザゲームなので、触っていただければ幸いです)

それでは、多少のお時間を拝借いたしますが、

オフィシャルハンドブックをお楽しみください。

2018年10月 オーガスト/ARIAスタッフ一同



### AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2018 AUTUMN

- 3 大図書館の羊飼い ショートストーリー  
幸福の羊飼い
- 8 βサービス実施中!!  
あいりすミステリア! ~少女のつむぐ夢の秘跡~
- 10 スタッフ対談
- 11 あとがき

# 幸福の羊飼

加賀宮孝一

放課後の中庭は生徒たちの溜まり場だ。雑談中の女子に、ジョギングをしている運動部。皆、思い思いに過ごしている。

ここで待ち合わせをしているのだが、相手の姿はまだない。読書で時間を潰すとしてしよう。

ベンチに腰かけて本を開く。太宰治の『グッド・バイ』。何度も読み返した本だ。そういえば、あの時も同じ本を読んでいたな。

「きょーたらーさんっ！」

可愛い恋人の声が聞こえた。俺が振り向くよりも先に、背中に抱きついてくる。

「えへへ、不意打ち！ 本ばかり読んでると、こういう目に遭っちゃいますよ……ぎゅーっ！」

……豊かな胸が押しつけられている。本人は無意識だろうが、俺は落ち着かない。

首に回された細腕を掴んで、立ちあがった。

「きゃーっ。ごめんなさいっ、降ろしてくださいーい！」

俺の首にしがみついたまま、楽しそうに叫んでいる。

腰をかかてやると、弾むような足取りで正面に回りこんで来た。

「お待たせしました、京太郎さん」

金魚……いや、美沙希が満面の笑顔のままべっくと頭を下げる。『金魚』は美沙希が羊飼いだっただ頃の名前だ。

「いきなり抱きつくなんて。首を絞められるのか

と思った」

「ぶう。そんな事しませんよう」

小さく頬を膨らませている。仕草がいちいち動物的可愛い。

今日は図書館もカミツレも休みなので、放課後デートの約束をしていたのだ。

「あ、その本」

俺の持つている本を見て、懐かしげに目を細めた。

「私と初めて会った時も読んでましたよね」

「ああ。カミツレでな」

「ちよっと前のことなのに、もう懐かしいです」

それだけ、俺たちの過ごしてきた時間が濃密だということだ。

「あの時はまさか、恋人になるなんて思わなかった」

「私もです。ふふっ……運命の相手って、見ただけでは分からないものなんですな」

恥ずかしいことを言いながら手を握ってくる。

俺も指を絡ませながら握り返した。

「その本久しぶりに私も読みたくなってきました」

「え？ 美沙希ってこういう本読むのか？」

初耳だ。てっきり、活字には興味がないのかかと思っていた。

「けっこう読みますよ。というか、私ってどんな本を読むと思われてたんですか？」

「絵本とか」

「うわーん！ 子供扱い！」

「ぼほこ叩かれた。」

本好きになっただけは何かのだろうか？ 聞こうと思ったが、運動部のかけ声に遮られてしまった。美沙希は、走っていく運動部員の背中をじつと見つめている。

「運動部に興味あるのか？」

「あ、いえ。興味というか、体育会系っていいなあと思っています」

「文化系ですみませんでした」

「ち、違います。運動部の人が好みとかじゃなくて……わ、私が好きなのは京太郎さんだけですよ！」

握っている俺の手を振り回しながら熱弁した。

その健気さに胸を打たれ、抱きしめそうになる。

「運動部の人たちは、みんな目標に向かって頑張っているから……それが羨ましいというか。今の私には、ないものなので」

「目標か」

俺も少し前まで、特に目標もなく学園生活を過ごしていた。変わったのは白崎たちに出会ってからは、

「学園を楽しくする」という目標に邁進している今は、紛れもなく充実している。

だから、目標を持つことに憧れる気持ちはよく分かった。

「じゃあ、美沙希も何か目標を見つければいいんじゃないか」

「絶賛探し中なんですけど、ちよっと悩んでまして。目標を作ろうとしても、今の私には何が出来るんだろう……って考えてしまってます」

「絶賛探し中なんですけど、ちよっと悩んでまして。目標を作ろうとしても、今の私には何が出来るんだろう……って考えてしまってます」



「羊飼いいだった頃の自分と比べて？」

「はい」

かつて美沙希は、普通の人間ではなかった。人を幸福な人生へと導く超常的な存在——羊飼いい。その中でも、史上最高とまで謳われた羊飼いいだったのだ。

「なら、図書館の活動を手伝って見ないか？ 目標を見つるきつかけが、何か掴めるかもしれない」

「いいんですか？ 私が手伝いなんて、京太郎さんに迷惑を掛けてしまうんじゃない？」

「恋人のことを迷惑だなんて思わないよ。むしろ、もっと頼ってほしい」

「……京太郎さん」

呟くように言って、頬を赤く染めている。小さな身体を抱きしめると、「わぶっ」と声を出して俺の顔を見上げてきた。

「これからは、そういう悩みも全部打ち明けてくれると嬉しい」

「分かりました……私たち、恋人ですもんね。私じゃ頼りないかもしれませんが、京太郎さんも辛いことがあったら言ってください」

「ああ、もちろんだ」

至近距離で見つめ合う。このまま、顔を近づけてしまおうか。美沙希もそれを望んでいるのか、静かに目を閉じる。

その時、周囲の生徒たちからひそひそ声が聞こえた。

「はっ!!」

我に返り、慌てて離れる俺たち。とりあえず、ごまかすように咳払いをする。

「ひとまず今日はデートだな。図書館には俺から話を通しとく」

「は、はいっ。よろしくお願いします!」

手を繋いだまま、早足で中庭から離れた。

路上キス未遂のカップルとして噂になったのは、言うまでもない。

翌日の放課後。

俺と美沙希は、図書館の部室でパソコンに向かっている。画面に映っているのは依頼の一覧だ。

「依頼がこんなに来るなんて、やっぱり図書館ですごくいいです……何だか緊張してきました。どきどき」

「力まなくていいって。俺がフォローするから」

昨日の約束通り、美沙希は図書館の活動を手伝うことになった。そして今、どの依頼を受けるか選んでいる。

「気になった依頼はあるか?」

「うーん。『廃部寸前なので部員を集めてほしい』」

『学食のお客さんを増やしてほしい』、『気になるあの子と恋仲にしてほしい』……どれもこれも、助けてあげたくなくなっちゃいますね」

難しい顔でマウスを操作し、丁寧に依頼を眺めている。

「え?」

ぴたりと手が止まった。

『依頼人：図書委員 内容：図書館の除籍本を処分する手伝い』

画面にはそんな文字が並んでいる。除籍本とは、図書館の蔵書から外された本のことだ。新たに本を仕入れると、どうしても棚に入りきらなくなる。そういう時、誰も借りない古い本が除籍本となってしまうのだ。

「あのう、京太郎さん。除籍本って、普通は配布されたりするんじゃないですか?」

「うちの図書館も配布はしてる。だけど、単純に貰ってくれる人が少ないんだ。宣伝不足つてもあるだろうけど」

「それで、処分ですか」

何やら声が沈んでいる。なぜ、ここまで落ち込んでいるのだろうか。俺の疑問を感じ取ったのか、きゅっと身体を縮めてぼつぼつと語りはじめる。

「京太郎さん。私、実は本が好きだって言ったじゃないですか。私が本好きになったのは、両親の……特に母親の影響なんです」

「お母さんも読書家だったのか」

頷いた美沙希が、大切な思い出を慈しむように微笑んだ。

「両親の喫茶店には、本がたくさん置いてあって……お客さんがいない時は、お母さんがいろいろな

本を読み聞かせてくれました。それで、だんだん自分でも読むようになって」

「で、立派な本好きになったと」

「おかげ様で羊飼いになった後、たくさん本を読むのが苦ではなかったんです」

羊飼いが読む本には、人間の一生が記されている。美沙希はそれを何十万冊も読んできたのだ。

「私、処分される本をこのままにしておきたくありません。本を大切にしていた、お母さんとの思い出が……否定されちゃうような気がして」

膝の上で拳を握っている。こんなにも強い意思を見せるのは珍しい。それだけ、母親との思い出が大切なのだろう。

「じゃあ、この依頼は『除籍本を全て配布する』に変更だな」

「ふえっ!? 勝手に依頼を変えてもいいんですか!」

「除籍本を残らず処理できるんなら、図書委員も認めてくれるさ」

「な、なるほど」

「ただ、きつと楽じゃない。うちの図書館の蔵書量は半端ないから、除籍本も多いはずだ」

「うう……」

俺の言葉に萎縮したのか、少しだけ俯いた。しかし、すぐに顔を上げて真っ直ぐに見つめてくる。

「いいえ、やらせてください。お母さんとの思い出のためにも。それに……この依頼をやり遂げられたら、何か目標を見つけれられる気がするんです」

「そうか。分かった」

小ぶりの頭に優しく手を乗せた。

「俺も協力する。一緒に頑張ろうな」

「京太郎さん……ありがとっございます」

感動して声を詰まらせている。さらには、ぶる

ぶると震えはじめて目を閉じた。

「大好きですっ!」

「……美沙希?」

なぜか、いきなり抱きついてきた。

「はっ!? すみません、感情が昂ぶりすぎて思わず」

「いや、いいんだ」

離れようとした美沙希を抱きとめる。少しだけくせのある髪を撫でてやると、くすぐったそうに息を漏らした。服越しに伝わってくるのは、女の子の体温と柔らかさ。

「依頼のこと、すぐ図書委員に掛け合ってみよう」

「はい。でも、すみません……もう少しだけ、このままで」

俺の胸元に頬ずりをして甘えてくる。腕の中の温もりを、俺はさらに強く抱きしめた。

その後、図書委員に頼んで依頼を『除籍本の配布』に変更してもらった。除籍本の数はおよそ五百冊。予想を超える多さだ。

俺たちがまず始めたのはピラ配り。除籍本の配布を生徒に知ってもらうためだ。他にも、ウェブニュースや昼の放送で取り上げてもらったりした。

活動を始めて数日——俺たちは、今日も人通りの多い場所でピラを配っている。

「図書館では現在、除籍本の配布を行っています」

「興味ある方はぜひどうぞよ」

笑顔を振りまき、手際よくピラを渡していく美沙希。少しでも注目を集めるため、カミツレのウエドレスを着こんでいる。

「よろしければどうぞ……あ、あれっ? あれれっ!?」



ピラを落とし、慌ててしゃがみこんでいる。しかし、拾った拍子にまた別のピラを落とす。また拾おうとしてピラを落とし……無限ループだ。

いやあ、今日も可愛いなあ。

「京太郎さん。頷いてないで、助けてください」

……」

涙目で助けを求めてきた。ピラを拾って渡してやる。

「ピラ配り、今日も順調だな」

「はいっ。でも、本はまだまだ残っていますから。頑張らないと」

ここ数日で、俺たちは二百冊もの本を配布できた。宣伝の賜物である。しかし、それからペースは激減。残りの三百冊が全く減らない。このままでは処分確定だ。

美沙希もそれが気がかりなのか、悩ましげに首を傾げる。

「京太郎さん。残ってる本はどんなのが多いんですけどっけ？」

「誰も知らないような小説とか、廃刊になった雑誌。変な専門書もいろいろあるな」

探せば他にもあるだろうが、何しろ冊数が膨大なので把握しきれない。

「うう。どんな人が貰ってくれるのか、全く想像できません」

「興味の惹かれるラインナップではあるけど」

「はい。私も分かります」

だが、持ち帰ってまで読みたがる人は少ないだろう。図書館で立ち読みして、気になったら座って読むくらいが相応しい。

「ふう」

薄くなったピラの束を見て、息を吐いている。横顔からは疲労が窺えた。

「あんまり無理するなよ。元々処分する予定の本なんだ。貰い手が見つからなくても仕方ない」

「でも、諦めたくないんです」

ピラの束を、悔しそうにぎゅっと抱えた。

「ここで諦めたら私、自分にできることが本当に分からなくなってしまうので」

羊飼いだった頃の自分に比べて、今の自分に何ができるのが分からない——美沙希はそう言っていた。

「他人の人生を導くことはできなくても、せめて自分で決めたことくらいはやり遂げたいんです。でないと、目標なんて見つからないですよねっ」

そう言って片手でガッツポーズ。疲れを吹き飛ばすような笑顔だ。思わず、こちらの表情まで綻ぶ。羊飼いの頃の自分と比べてどうこうと言っている

が……俺からすれば、今が一番である。

「悪い。美沙希はやる気なのに、俺が弱音を吐いた」

「謝らないでください。京太郎さんが隣にいてくれるから、私はこんなに頑張っているんですよ」

そつと肩を寄せてきた。触れた部分が温かく、愛情が伝わってきたかのようだ。この温もりのためなら俺も頑張れる。絶対に本は処分させない。

「なあ、別の方法を考えてみないか？ 宣伝だけじゃ限界がありそうだ」

「別の方法ですか……」

「京太郎さんの部屋、もう三百冊くらい入りませんか？」

「無茶言うな」

「えへへ、すみません。冗談です」

子供のようにべろっと舌を出した。

「カミツシで引き取れないかって店長にも相談したんですけど、やっぱり無理みたいで」

「三百冊は流石にな……カミツシが図書館みたいになりそうだ」

ブックカフェばかりでアリだとは思うが、ちょっと想像してみるか。

——本棚の本をおもむろに抜き、淹れたてのコーヒーを飲みながら読書する。読む本は何だつていい。つまらなければ席を立つし、面白ければ読みふける。本の数だけ通いたくなる店だ。

「京太郎さん？ どうしたんですか？」

「あ、悪い。ブックカフェっぽいカミツシを妄想してた」

「ふふっ、両親の喫茶店がそんな雰囲気でしたよ。だから本好きの人たちに人気で……ああっ！」

いきなり声を上げた。驚いてピラを落としそうになる。

「そ、そうだ、ブックカフェ！ 京太郎さん、ブックカフェです！」

「待って待って。何の話だ？」

「学食の！ ほら、一緒に見た！」

「落ち着け。もう一回、ゆっくり説明を頼む」

「は、はい。えっと、図書部に依頼が来てたじゃないですか。『学食のお客さんを増やしてほしい』って」

「ああ。部室で一緒に見たやつか」

「それで私、両親の喫茶店の話をしていて、思いついたことがあるんです」

「……なるほどな」

何を考えているか俺にも理解できた。売れない学食に、余った除籍本。材料は揃っている。

「除籍本を利用して、依頼してきた学食をブックカフェにできませんか？」

「美沙希の両親の喫茶店みたいに、つてことだよな」

「はい！」

ブックカフェとなれば本好きの客が増えるだろう。用意できる本は特殊かつ古いものばかりだが、それが逆に興味を惹ける。少なくとも、俺はそういう店に通ってみたい。

「で、もし上手くいけば……」

「除籍本は処分されずに済むし、学食の依頼も完了！ 一石二鳥です！」

嬉しそうにピースサインを突きだしてくる。俺はその手を取って、歩きだした。

「なら、まずは学食に行つて提案だな。図書委員にも連絡しなくちゃいけないし……場合によっては店の改装が必要かもしれない」

「じ、自分で言い出して何ですが、そこまでやって大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ、俺が何とかする。それに、やり遂げるっ

て決めたんだろ？」

「……はい！ 諦めなければ何とかなるって、あの時、京太郎さんにも教えてもらいましたから！」

あの時——美沙希が人間に戻ろうとした時、俺は何度も『諦めるな』と叫んだ。そして美沙希は、諦めることなく困難を乗り越えた。

だから今回も、きつと大丈夫だ。

ブックカフェのアイデアを出してから一週間——学食は見事に生まれ変わった。

二人で学食を訪れ、店の扉をくぐる。すると、本とコーヒーの匂いが鼻腔を通り抜けた。店内にはずらりと本棚が並べられており、ぱっと見は図書館だ。

本棚の間を抜けてテーブルにつく。本棚が壁になっており、他の客が視界に入ることはない。

美沙希が嬉しそうな顔で、ひそひそと話しかけてくる。

「何だか、隠れ家みたいなお店です」

「読書空間としては最適だな」

「ふふっ。店員さん、私たちのアイデアを採用してくれてよかったですね」

「客足もばっちり伸びてるって話だ。美沙希のおかげだな」

本棚に並べられた本を順番に眺めていく。文芸書、アート系、ノンフィクション、洋書。雑多にも程があるが、読書家脳がピンポイント刺激された。装丁が古いのも、店のレトロな雰囲気合っている。

その雰囲気と雑多な本に惹かれ、本好きの生徒が多く来店しているのだ。

「京太郎さん、本が読みたくなって顔になってますよ」

「はっ!?」

「私より本が好きなんですわね……ぐすん」

口が笑っているせいで、嘘泣きなのが丸わかりだ。お互いこらえきれずに吹きだし、小声で笑い合った。処分されるはずだった本たちを見回して、俺たちは満足気に頷く。

「本が大事にされているのを見ると、やっぱり嬉しいな」

「はい。それに、店員さんもすごく感謝してくれて」客足が増え始めた時、店員は泣きそうな顔で美沙希に礼を言っていた。何でも、実は廃業寸前だったらしい。

「店員さんにお礼を言われた時……私、ちょっと驚いてしまったんです」

「俺もだ。まさか廃業手前だったとはな」

「いえ、そうではなくて。羊飼いのような力があるくても、誰かを助けてあげられるんだなあと思って」すつきりとした顔で見つめてくる。

「私、ずっと思っていました。羊飼いだつた頃は、人がより良い人生を歩めるように導いてきた……でも、普通の人間にそんな大層なこととはできないって」

テーブルの上に載せられた手が、ゆっくりと握られる。

「京太郎さん……私、目標が見つかったんです」

「そっか。聞かせてもらってもいいか？」

こくりと頷いた美沙希が、すうつと息を吸いこんだ。

「私はもう、羊飼いでありませんが……人がより良い人生を歩むための手助けをしたいです」

「ああ。美沙希らしくていいと思う」

握られた小さな手を、俺は自分の手で優しく包みこんだ。

「目標が見つかって良かったな」

「はいっ」

少しだけ潤んだ瞳から、一粒だけ涙が流れている。それを指先で拭いてやると、照れくさそうな笑みをこぼした。

「もしかしたら……人のままでも、羊飼いになれるのかもしれないね」

清々しい顔で言う。

羊飼いは、人を幸福な人生へと導く超常的な存在。けれど、美沙希なら……特別な力がなくなつて、たくさんの人を幸せにできるはずだ。俺を毎日、こんなにも幸せな気持ちにしてくれるのだから。





# あいらすのミステリア!

～少女のつむぐ夢の秘跡～

βサービス実施中!!

**タイトル** あいらすミステリア! ～少女のつむぐ夢の秘跡～

**プラットフォーム** PCブラウザ (DMM GAMES よりログイン) / AndroidOS

**キャラクターデザイン・原画** べっかんこう / 夏野イオ **シナリオ** 榊原拓 / 内田ヒロユキ / 安西秀明

**音楽** ActivePlanets **CG着彩** べべる / ひろた / 巻道 / 弥弛 他 **背景美術** べべる

# 4コマ漫画の連載がスタート!!

作:めざし

図星かな。



漫画の続きは公式サイトで!



## あいりすミステリア 4コマ漫画

毎週更新中!

URL ▶ <http://dmm-imys.com/comic/>



# Android版 配信スタート!!

あいりすミステリアのβサービス開始と同時に、  
Android版についてもリリース致しました。  
持ち歩いて、場所を選ばずにプレイ頂ける  
Android版も、ぜひお楽しみください!

- \* Android版は「あいりすミステリア!R」のみご提供です。
- \* ゲームのプレイデータは、「あいりすミステリア! PCブラウザ版」、「あいりすミステリア!R PCブラウザ版」および「あいりすミステリア!R Android版」の全プラットフォームで連携しており、一つのアカウントでお楽しみ頂くことが可能です。



Android版  
インストール方法  
はこちらをチェック!



# スタッフ対談

べっかんこう×榊原拓

#49

2018.10.1 17:50 開発室にて

榊原拓(以下「榊」) さあ、対談の時間がやってまいりましたよ。

べっかんこう(以下「べっ」) おませしました。あいまのサービスの再開しました!

榊 べっかんさんプレイしてますか?

べっ やってますよー。開発がまだまだ立て込んでいて、育成が進んでいないのが悩みです。

榊 結構強い敵も出ますもんね。僕は最近全属性を育てなきゃダメかなーと思って、育成するキャラや聖装の幅を広げています。

べっ 属性が結構重要みたいですね。

榊 有利属性でパーティを組むと、推奨のパーティランクより低くても案外勝てたりするんですよ。

べっ なるほどー。ちょっと編成を見直してみようかなあ。

榊 あと、NやRの聖装もなかなか使い勝手がいいなあと気づいたりしてます。

べっ 使い方次第で十分戦力になるみたいですね。一生懸命描いたので、無駄にならないのはありがたいです。

榊 なお開発者アカウントとかないので、僕らも普通に一からプレイしています。

べっ ツイッターとかでイラスト上げてくれると嬉しいので是非描いてください! 水着イリーナは個人的にちょっとお気に入りなので出てくれて嬉しいです。萌技演出も格好良く作っていただきました。

榊 ちっちゃい子にゴツイ武器という組み合わせは何というかもただただ最高です。——リニューアルと言えば、バブーが活躍するようになったのが個人的にはヒットです。ファミが連れてくる豚の。

べっ ファムの代わりにバブーが攻撃するの、ちょっと面白いですね。デザイン当初はあんなに活躍するなんて思いませんでした。

榊 バブーは、ファミの立ち絵の足下にいるんですが、見切れたりしてかわいそうで

したもんね。

べっ そうなんですよ。だからSSRではちよう強そうにしてあげました。

榊 あとリニューアルとえば、脳ホエさんが描いてくれた想飾も実装されましたね。

実は、絵はもうずっとずっと前にできてたので、今回実装されて脳ホエさんにもやっと報告ができて良かったです。

べっ そうですね。たくさん描いていただきました。どれも可愛く楽しく描いていたので、是非手に入れて欲しいです。

榊 今後もキャラクターの誕生日などで続々と実装される予定です。

べっ まだまだお見せしていない聖装やイベントを用意していますので、今度とも楽しみにしててください!

榊 僕らも頑張ってますよ!

べっ がんばります!



## \* あとがき

Postscript

オフィシャルハンドブックをお読みいただき、ありがとうございました。  
お楽しみいただけましたでしょうか。

9月13日にサービス再開となった『あいりすミステリア!』は、  
お陰様で予想を大幅に超えた多くのプレイヤーの皆様にお楽しみいただけており、  
開発スタッフ一同驚くとともに、大変嬉しく思います。  
改めて御礼申し上げます。

現在、オーガストの担当部分であるグラフィックや  
シナリオ、音楽につきまして、本編、聖装ストーリー、  
期間イベントなど様々なコンテンツ追加に合わせ、  
先を見据えた準備を進めています。  
継続的に物語を紡いでいけるのは、こうした形態の  
ゲームのメリットの一つでしょうか。  
また、システムやインターフェースにつきまして、  
ストレス無くプレイできるよう改良を図っていきます。

昨今、デバイスや流通手段なども含め、多種多様なチャレンジが  
できる環境になりました。その中でオーガストも、キャラクターを  
中心とする点だけはブレずに、様々な形態やジャンル、規模に囚われない  
ソフトの開発を模索していきたいと考えております。

『あいミス』の開発にあたっては様々なご意見をお寄せいただきました。  
誠にありがとうございました。  
すべて参考とさせていただきますので、  
これからも、皆さまのご意見ご要望を頂戴できればと思います。

また、『あいりすミステリア!』の開発と平行して  
『千の刃濤、桃花染の皇姫』のファンディスクの制作も  
進めています。こちらは来年中の発売の予定ですので、  
続報をお待ちくださいませ!

2018年10月 オーガスト/ARIAスタッフ一同



## \* AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2018 AUTUMN

企画・制作



<http://august-soft.com/>



<http://aria-soft.com/>

当小冊子の一部のページを撮影し、ブログ・SNS等に転載していただくことは問題ございません。※全ページを複製配布することはご遠慮下さい。



**AUGUST OFFICIAL HAND BOOK**  
**2018 AUTUMN**